

たとえ咲かない花だと
しても

北間 ユウリ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

WA2000と、少女指揮官。

すべては語らない。すべては伝わらない。

そんな二人のすれ違いの物語、かもしれない。

目次

File. 0	34
File. 1	1
File. 2	4
File. 3	8
File. 4, the first part	14
File. 4, the latter part	19
File. 4, the another points.	28
File. 0	34

番外編

File. Extra [Wedding]	44
File. Extra [中秋の名月]	48

File. 1

「ワルサーは強いね」

ある日の昼過ぎ、作戦報告書を整理している最中に、指揮官はそう呟いた。

急に何を言い出すんだと顔を上げれば、彼女は視線を報告書に落としたまま、どこか悲しげな表情を浮かべていた。

私達の指揮官は年若い少女だ。聞いた話ではまだ成年も迎えていないらしい。

昨今の情勢で、軍事関連の仕事に就く人間は少なくない。女性の兵士というのもそれなりに居ると聞く。

しかし、グリフィンの女性指揮官はかなり珍しい。選抜試験の突破率の低さもあるが、大抵はカリーナのように補佐役に回ることが多いからだ。

過去に一度、彼女がどうして指揮官になったのか聞いたことがある。彼女は人間の中ではかなり見た目が良いから、お金を稼ぐためなら他の仕事でも良かったはずだ。

私の質問を受けた指揮官は、機械になった左腕を抱いて、寂しそうに笑って言った。
「復讐 だった」よ

彼女の左腕は、鉄血の襲撃で家族と共に失われたという。その時に指揮官になること

を決意したらしい。

その話を聞いて、なるほど、と納得した部分もあった。私は指揮官が着任した頃に配属された古参の人形で、初期の彼女の指揮は、徹底的に鉄血の人形を殲滅するようなものだったことを覚えている。

しかし、違和感を覚える部分もあった。それは、過去形だったことだ。ある時期から、彼女はそのような指揮をしなくなった。任務達成を最優先とし、交戦を最小限に留めるようになった。それと、何か関係があるのだろうか。

今は違うのかと聞こうとして、やめた。彼女の笑った顔が、今にも泣き出しそうに見えるから。

「ワルサーは、強いね」

もう一度、彼女は呟いた。

指揮官の言う「強い」が戦闘面の事ではないのは分かっていたが、だからといって何と言えればいいのか分からず、

「別に、ただ普通に戦っているだけよ」

とだけ答えた。貴女の指揮が良いから私が実力を発揮できるとは、恥ずかしくて言えなかった。

ただ、やはり慰めにはならなかったようで、

「やっぱり、強いね」

と、彼女は弱々しく笑って言うのだった。その顔が痛々しくて、私は再び作戦報告書に視線を落とした。

羨ましいな、という言葉は、きつと空耳だ。

私は強いわけではない。指揮官の指揮が、命令があるから、照準を合わせられる。引き金を引ける。命を奪える。

それは、裏を返せば、私は指揮官が居なければ照準が合わせられない。引き金が引けない。命を終わらせる覚悟が出来ない。役立たずのガラクタでしかないということ。

そんな私に、指揮官に依存する事で目を逸らす私に、羨むモノなど一つもないから。だから、きつと間違いなのだ。

File. 2

久し振りに重症を負った。

私の武器は、名前と同じワルサーWA2000というセミオートマチック式のライフルだ。いや、私の名前がライフルと同じなのか。

ライフル、つまり狙撃銃は、その名の通り狙撃に適した銃である。つまり、部隊の後方から味方の支援、及び敵部隊のリーダー格の狙撃を行う事が多い。そのため、負傷する事は前衛に比べれば遥かに少ない。だが、絶対が無いのが戦場であり、負傷する時はするのだ。

今回の負傷は、敵ライフルに狙撃されて負ったものだ。前衛の援護に気を回し過ぎ、敵にもスナイパーが居ることを見逃していた。ただ、その結果真つ先に私が狙われ、前衛が狙撃される前に存在を知れたのは不幸中の幸運だろう。

狙撃によって左腕を破壊された私は、スナイパーの存在と潜伏予想位置を隊員に伝え、皆に先立って撤退した。片腕での狙撃は精度が落ち、味方を撃つ可能性が高くなるからだ。狙撃できないライフルはただの足手まといでしかない。

占領した飛行場に到着したとき、敵部隊の殲滅と、敵司令部制圧の報告が入った。無事に作戦が成功したことを知り、安堵の息を吐いた。その後、合流した味方と共にヘリで帰還した。

問題は、帰還後に起きた。

私は、損傷を修復する許可を貰うために、司令室へと向かっていた。隊長が先に報告をしているはずなので、すぐに許可が貰えると思っていた。

だから、司令室に居るはずの指揮官がこちらに向かつて走ってきたのを見て、驚いた。隊長の報告はいいのかとか、そんな事が頭に浮かんだ。

「ワルサー、大丈夫!?!」

額に汗を浮かべ、息を切らしているので、司令室から全速力で走ってきたらしい。

大丈夫、と返事をする間もなく、彼女は捲し立てるように、痛くないかとか変に感じる場所はないかとか、そういったことを聞いてきた。

マシンガンのように繰り返される言葉に口々に返事をすることも出来ず、涙を浮かべ私の指揮がなんちゃらと言いだした辺りで、右腕で彼女を押し退けた。

「あのね、そう一気に聞かれても答えられるわけないでしょ!! 腕なら応急処置はしてあるし、修復すれば元通りよ。その許可を貰いたいのに喋らせて貰えないってどういうことよ!」

「あ、ごめん……」

途端に消沈する指揮官。言い過ぎたか、と思ったが、ここで言っておかないと後々更に酷いことが起きるかもしれないからと、心を鬼にして言葉を重ねる。

「それにね、”たかが”人形一つが腕無くしたくらいでピーピー騒ぐんじゃないわよ！今回は私が油断したからだけど、戦闘がもつと激しくなれば損傷する人形だつて多くなるわ。その度に貴女が騒いでたら、戦場に出てる人形にもつと被害が出ることになるのよ！」

「ごめん、なさい……」
でも。

俯く彼女の口から、そんな言葉が溢れた。

「でも、またワルサーが寝たきりになつたらつて考えたら、私は、私のせいで、また、ワルサーが……」

ごめんなさい、ごめんなさい。

頬を濡らしながら謝り始めた指揮官をどうしたら良いのか分からず、助けを求めるように辺りを見回しても、誰も居なかつた。

だから、一度押し退けた彼女を右腕で抱き寄せた。涙が左肩を濡らした。

「……その、言い過ぎたわ。ごめんなさい。それと、この怪我は私の油断が招いたもの

よ。指揮官のせいじゃないわ。……その、」

言葉が詰まる。これを言っているのか、今言うべきなのか。そんな迷いが頭を駆け巡る。ただ、今言わないと、いつまでも言わないだろう。だからと、思い切つてその言葉を口に出した。

「……前に、貴女は私が強いって言ったけど、それは貴女の指揮が良いからよ。指揮が良いから、私は実力を発揮できる。だから、私が強く見えるの。私が強いのは、貴女が居るからよ」

ピクリと、腕の中の指揮官が反応した。そのまま、少しの間だけ沈黙が続いて、

「……ありがとう」

と、小さな声が聞こえた。

「わ、分かったならいいわ！　そ、それじゃあ私は修復に行くから、あ、貴女はちゃんと報告書を作っておくよ!？」

バツと指揮官を解放し、赤くなつた顔を彼女から背ける。行つてらっしゃい、という声を背に受けながら、リペアルームへと足早に向かった。

だから、彼女がどんな表情をしていたのか、私には見えなかった。

File. 3

途端に、世界が色褪せた。

この辺り？ いえ、もう少し上。あ、ちよつと行き過ぎ。はい、そこで止めて。
風は？ ほぼ吹いてない。だから、少し右に修正。

タイミングは？ 今。

カチリ。当たった。

色が戻った。

「100点に命中。流石ね」

左から声が聞こえた。そう言えば、同僚に観測手を頼んでいたのだった。

「それ、胴体に当たったってこと？」

「そうだけど？」

「なら外してるわ」

「どういうこと？」

観測手、Five-seveNが、おかしなものを見るような目をしながら聞いてき

た。確かに、1000点に当てておきながら外れたとは意味が分からないだろう。

だが、それではダメなのだ。何故なら、

「私、頭を狙ったの。人間なら胴でもいいけど、私達の敵はソコじや止まらないでしょう？」

だから、外れてるのよ。

なるほどねえ、と納得した様子の子のFive—sevenを余所に、ライフルを片付ける。今訓練したところで、変な癖が残るだけだ。

「1000mで当てただけでも凄いと思うけど」

「ライフルなら当たり前よ。寧ろ、相手が動かないなら外す方が難しいくらいね」

「ふーん、そうなの。それで、今日は一発でおしまい？」

「私、感覚派なの。変な癖が付いたりしたら、直すの大変なのよ」

修復して3日経つが、未だに左腕には違和感が残っている。この状態で当たるように調整しても、慣れた頃にはまた外すようになってしまう。それならやらない方が良い。

「ふーん。私にはあんまり分かんないわね」

「ちっ。これだから天才って奴は……」

舌打ちしてからライフルケースを担ぎ、未だに双眼鏡でのを見ているFive—sevenに声を掛ける。

「私は戻るけど、アンタはどうすんの？」

「んー、アタシはもうちよつと居るわ。何だかアタシも撃ちたくなっちゃった♪」

そう言って、彼女はホルスターから彼女の名の元となった銃を取り出した。

ふふーんと鼻歌を歌い出した彼女に背を向けて、出口に向かって歩き出す。

「じゃあね」

「調子が戻ったらまた呼んでね」

挨拶を交わして、射撃場を後にした。

データルームには、過去の作戦記録が全て保管されている。許可さえ取れば自由に閲覧できるため、新しく配属された人形の多くは、閲覧することでこの基地での闘い方を学習する。

私がデータルームを訪れたのは、過去に参加した作戦を振り返り、イメージトレーニングを行うためだ。狙撃訓練が出来ないなら、過去を追体験するのが有意義な訓練になると私は考えている。

指揮官が見つからなかった為、カリーナに許可を貰い、私はデータルームに入った。どうやら先客が居るらしく、既に部屋には電灯が点いていた。

一応挨拶をしておこうと、その姿を探すと……

「…………指揮官?！」

散らばった書類の上に突つ伏したまま、ピクリとも動かない指揮官の姿を見つけてしまった。最悪な想像が脳裏に浮かぶ。急いで駆け寄り、その小さい身体を揺らして声を掛ける。

「ちよつと、大丈夫?!? ねえ、ねえつたら! 起きて、起きなさい!!」

「…………うる、さい…………」

ぼそりと、小さくだが確かに声が聞こえた。そして、ゆっくりと顔を上げる。ちゃんと生きていた事に、ほつと安堵の息を吐く。

「良かった…………」

「荒く起こされた私は、ちつとも良くないんだけどね」

睡眠を邪魔され、不機嫌らしい指揮官が頬を膨らませた。怒ってますと表現したいのか、目を細めて睨んでいるが、迫力は無い。

「そもそも、どうして死んでるなんて思ったの? 普通、寝てるって考えるでしょ」

「だ、だって、貴女、ピクリとも動かないから…………」

「…………そんなこと、とつくに知ってるでしょ」

拗ねたように彼女は言うが、私はそんなこと知らない。そもそも、指揮官が寝ている姿を見たのも今日が初めてなのだ。

だが、そう言ったら彼女は更に機嫌を悪くするだろう。今回の事は、落ち着いて対処しなかつた私に非がある。

なので、話を逸らすことにした。

「そ、それで！ 貴女、ここで何してたの？ そこに散らばってる書類は何なのよ？」
「……これ？ これは作戦記録だよ。だいたい、3カ月くらい前からの」

そう言つて、彼女は散らばつた作戦記録を片付け始めた。盗み見れば、確かに3カ月前の日付が記されている。ただ、全てではないようで、幾つか抜き出していたらしい。

その日付と作戦内容を見て、それが私の目当ての物でもあることに気付いた。

「それ、そのままでもいいわよ。私も見るから」

「えっ?」

「それ、私も参加した作戦の記録でしょ?」

空気が凍つた。

驚きと、怯え、だろうか。

彼女の表情に、そんな色が現れた。

「私、目が良いの。この程度の距離なら、小さな文字でも見えるわよ」

だから、驚き「は」解消する。怯えは、その理由が分からないから。

「そう言えば、カリーナが探してたわよ。何か話があるみたい」

「……うん、分かった。それじゃあ、これの片付け、よろしくね」

そう言つて、指揮官はデータルームを出た。その姿を見送つて、机一面に散らばつた作戦記録を一つに纏める。

「……これ、数時間で読み終わる量じゃないわよ」

分厚い本を数冊重ねたかのような紙の山を前に、ぼそりと呟いた。

もし、私のように追体験をするなら、それこそ3日掛けてやっと終わるか、ということころだろう。

変な想像を頭を振つて追い出し、山から適当に数枚の作戦記録を抜き出す。そうして一つ一つ、時間を掛けて読み返した。

File. 4, the first part

深く、鋭く息を吐く。

憎たらしいほどに輝く星を見上げ、普段に増して明るい夜空を睨む。

「……こんな日に光ってるんじゃないわよ」

毒づいたところで星が消えるわけでもなく。

視線を下ろし、周囲の警戒を再開した。

そもその発端は、作戦司令部が奇襲された事に始まる。

その作戦は本部直々の辞令だったらしく、普段は通信によつて司令室から指揮をしている指揮官が戦場に同伴することとなった。

別に、それは珍しい事ではない。重要な作戦であれば彼女は自ら戦場に赴いたし、過去に何度か本部の命令で同じような事はあった。

ただ、今回は「おつかい」と揶揄される作戦だったのが災いした。戦力をほぼ前線に投入し、司令部には数体しか人形を残していなかったのだ。

鉄血の奴らは本体とは別に、別動隊を編成していたらしい。たつた数体だけだったとはいえ、作戦を終え、帰還準備を始めていた私達の不意を突くには十分だった。

指揮官の咄嗟の指揮で司令部を放棄、バラバラに別れて難を逃れたものの、合流地点を定めてなかつたため、日が暮れても合流する事が叶わなかつた。広域通信を使うという手段もあつたが、他の皆がどんな状況にあるのか分からないため、使うのは控えた方がいいと判断した。

私達の状況は先に帰還した本隊からグリフィンに伝わっているだろうが、救助が来るのは早くても明日になるだろう。夜間の行動は非常に危険だからだ。

つまり、一夜を明かす場所を確保する必要があつた。それは、同伴者の為にも必須なことであつた。

「……指揮官、まだ歩ける?」

「うん……、大丈夫……」

指揮官は、何とかさう言つた。体力の限界が近いのだろう。かなり体の揺れが大きかつた。

司令部から撤退する際、指揮官も誰かに着いて逃げる必要があつた。あくまで人間である彼女には、鉄血と闘う手段が無いからだ。

他の人形が敵奇襲部隊に牽制している中、彼女を連れ出す役目を命じられたのは、彼

女に一番近かった私だった。

急いでライフルを背負い、彼女を横抱きに抱えた私は、真つ先に司令部を飛び出した。そのまま全速力で距離を稼ぎ、ある程度離れた所で彼女を下ろし、仲間と合流するために歩き始めたのだが、やはりまだ年若い人間の少女にはかなりの負担だったのだろう。

「辛くなったら言いなさいよ。背負ってあげるから」

「……大丈夫。ワルサーは、警戒を、お願い。私は、気に、しないで……」

そう言つて、彼女は弱々しく、強がりの笑顔を浮かべた。

無理をしているのは分かっている。しかし、ここで彼女を背負えば、いざというときに動きにくくなることを彼女も分かっているのだ。だから、気丈に振る舞おうとする。だから、彼女の負担を少なくする速度で、しかし急いで休める場所を探した。

日が完全に落ちる少し前によく見つけたのは、放棄された何かの倉庫だった。所々朽ちてはいるが、一晚過ぐすには問題は無いだろう。

中を覗いてみれば、空の木箱が幾つか転がっているだけで、何か有るわけでは無さそうだった。少なくとも、ここ最近に何かが居たわけではなさそうだ。

「……大丈夫そうね。ここで休むわよ」

「……やつと、着いたあ……」

疲労の限界だったのか、倉庫の壁に手をつき、よろよろと座り込む指揮官。

そんな彼女を抱き上げ、私は倉庫の中に入った。

「ほら、もう少し頑張りなさい。休むならちゃんとした所じゃないと」

「……うん」

かなり疲れているのだろう。指揮官は、微かに頷いて、そのまま黙ってしまった。

仮眠室を見つけ、中に入ってみれば酷いものだった。シーツの殆どは虫食いが酷く、ベッドは脚が折れていたり曲がっていたりと散々だった。

その中から比較的マシな物を選び、何とか及第点のベッドを用意した。

「基地のベッドよりは固いでしょうけど、休めない程じゃないわ。ま、我慢なさい」

「……ううん。ありがとう」

横になった指揮官は、お礼を言って、微笑んだ。

しかし、ベッドが自分の分しか無いことに気付いたのだろう。手を伸ばして、私の服の袖を引く。

「ねえ、ワルサーのベッドは？」

「あのねえ、ここは敵地なのよ？ 見張りも無しに夜なんか明かせるわけないでしょ」

「でも、ワルサーも寝なきや……」

「いい？ 私は人形なの。一日寝なかつたとしても、何の影響もないわ」

できるだけ優しく彼女の指をほどこき、ベッドの上に戻す。

「寝る前に、私に命令しなさい。そうしたら、絶対に貴女を守ってみせるから」

彼女の目を見つめ、優しく言い聞かせる。しばらく見つめ合い、やがて彼女はこくりと頷いた。

「……ワルサーWA2000に、倉庫周辺の見張りを命じます。敵については、自身の判断で対応。私の判断を仰ぐ必要はありません」

よつほど疲れていたのだろう。他の人形と同じように私に命令した後、指揮官はすぐに眠った。ピクリとも動かないが、呼吸の音だけは薄く聞こえた。

彼女に一枚残しておいた無事なシーツを掛けてから、私はライフルを持って倉庫の屋根に登った。既に日は落ち、周りは暗くなっていた。

File. 4, the latter part

吐いた息が白くなり、本格的な夜が到来した事を告げる。

それを見て、ようやく私は張っていた気を少し緩めた。

夜警において、特に警戒が必要な時間帯が二つある。その一つが、日が落ちてから夜闇に目が慣れるまでの数時間だ。今日みたいな、星明かりでいつもより明るい夜は特に。

明るさは暗さを際立たせる。暗闇に紛れるモノを見過ごさせる。それが、致命的なミスを呼び込んでしまうからだ。特に、目が命のスナイパーは、他より目が良いという自信を持っているからこそ陥り易い。

だから、耳からの情報に集中する。光は時間に左右されるが、音は何時だつて同じだから。

目で遠方を注視しながら、風に乗った音を注意深く拾っていく。草木が揺れる音に異音が混じれば、直ぐにそちらを確認する。大抵の場合、それは野性動物なのだが、だからと言って確認しない理由にはならない。もしそれが敵ならば、見逃せば必要以上に近付かせることになる。そしてそれは、指揮官に危害が及ぶ可能性を高める事を意味す

る。

私だけならここまで警戒はしない。何か特別な情報を持っているわけでもなく、壊されても新しい私が入プロードしたデータをインストールすれば戦力に支障は出ないから。

しかし、指揮官はそうはいかない。彼女は生きた人間だ。死んでしまったらそこまです。私達とは違い、彼女には明確な終わりがある。

だから、絶対に死なせてはいけない。この私は、彼女が居なければ「存在価値」がない。次の私も、その次の私も、私が「私」である以上、彼女が必要になる。だから、彼女は死なせない。

一度、深く息を吐く。それは、張り詰めた気を緩める合図のようなものだ。

司令部からの撤退から数時間、ずっと最大状態で演算を続けていたAIを、少しの間だけ休める。それだけで、少し頭が軽くなった気がした。

少しだけ、辺りが明るくなった。雲に隠れた月が、また姿を現したらしい。耳に集中したまま、ざっと辺りを見回して――

視界の端に、一瞬だけ何かの光が見えた。

反射的に前に倒れる。髪が舞い、その数本が何かに断ち切られた。

「狙撃!」

声に出す、聞く、理解する。

すぐに動けなかったら、光に気付かなかつたら。そんな「もし」が起こっていたら、私は今の一撃で終わっていた。

追撃を避けるため、屋根から飛び降り、倉庫に身を隠す。暫く待つが、懸念していた追撃は行われなかった。おそらく、狙撃手は移動している。

状況は最悪だ。敵の位置は分からず、こちらの戦力は私だけ。敵の数も分からず、逃走も出来ない。かといって、いつまでも立て籠る訳にはいかない。

(ダミーの一つでもあれば、囮にして状況を打破できるのに……！)

無い物ねだりをするしかない現状に苛立ち、思わず舌打ちをしてしまう。

しかし、その音を打ち消すかのように、倉庫から離れた場所から銃撃の音が聞こえた。もう襲撃されたのかと思ったが、どうやら違う。銃撃の音は一致せず、襲撃には距離

がありすぎる。

顔を出して確認するか否か悩んでいる間に、短距離秘匿通信が開かれた。そして、その相手を知り、私は絶句した。

森の中で、唯一開けた場所。そこを舞台に、その人形は踊っていた。否、それは回避運動なのだ。

適当に弾幕を張り、相手からの銃撃を制限する。それでも飛来する弾は、身体を反らすことで避ける。

なるべく動かないで、狙われるように、しかし長時間避け続ける。下されたオーダーに忠実で、しかし洗練された動きは、まるで踊っているかの様に錯覚させる。

そんな中で、彼女は自然に通信を入れる。まるで、銃撃の中に居ないかの様に。

「こちら《ダンサー》、任務遂行中。敵の推定戦力はA R型3体よ。オーバー」

『こちら《コンダクター》、手は打ったわ。後は、打ち合わせ通りに。オーバー』
「こちら《ダンサー》、了解。じゃあ、反撃するわね」

通信を切り、リロードすることで弾幕をわざと途切れさせる。

当然、敵の銃撃が激しくなる。だが、彼女はリロードを終えた自身の銃を構え、自然に引き金を引く。

「BANG」

彼女が茶化すように口にした擬音と共に、鉄血の人形が1体、崩れ落ちた。

彼女はそれを確認せず、また踊り始める。

観客が減り、しかし激しさを増した舞踏は、突然ピタリと止まった。

そして、彼女の頭が次に通るはずだった場所を、音速の銃弾が突き抜けていく。遅れて、乾いた銃声が響いた。

「Welcome to our stage」

そう言つて微笑み、彼女ーFive—sevenはまた踊り始めた。

彼女の舞台は、観客が居なくなるまで続く。

(嘘……！)

叫びそうになつたのを、ギリギリ抑えた。彼女の言う通り、本当にチャンスが訪れた。森の中に向かつて撃たれた一発の銃弾。それが発射される瞬間のマズルフラッシュを、私は確かに見た。言われなければ、きつと見逃していた。

頭の中を駆け巡る様々な思いを一旦無視し、スコープを覗く。ライフルはとづくに構えていた。

スコープを少し調整すれば、優先度の高い相手に向けて銃口を向けている敵スナイパーの姿を捉えることができた。

距離は測定済みだ。先程のフラッシュと音の時間差で求められる。大体700mとあったところで、外す距離ではない。

風の強さ、相手との高さの違い等を計算に入れ、正確に照準を合わせる。そして、後は引き金を引くだけだ。引くだけ、なのに。

「引きなさい、引きなさいよっ！」

自分に向かって怒鳴る。なのに、引き金にかかった指は全く動こうとしない。

どうして私はこうなのか。分かっているのに治らない欠陥に、涙が出そうになる。

製造されてから今まで、自分の判断では「殺す」為の引き金が引けなかった。どんなに訓練で「的」の頭を撃ち抜いても、「敵」の頭は自分では撃ち抜けなかった。

「引きなさいよ！　なんで、なんで!!　なんで動かないの!?!」

理由は解っている。今の私に下されている命令は「自分の判断で」敵に対応すること。「殺せ」とは命令されていない。

私は殺す為に生まれた存在だ。その為に造られて、その為に武器を持っている。だから、殺さなければ存在価値が無くなる。

なのに、いざ敵に照準を合わせても、「殺せ」と命令されなければ殺すことができない。たとえ敵でも、機械だとしても、命を奪う覚悟が自分では出来ない。それなら、私である必要がない。

「それでも、指揮官は私を使ってくれてる！　なら、それに応えるべきでしょ!?　なに怖じ気づいてるのよ!!」

自分を叱咤する。今引かなければ、その恩に応えられない。彼女の命を背負っている今だからこそ、恩に報いるチャンスなのだ。

引け、引け、引け！　お前が撃たなければ、指揮官も死ぬぞ！

何度も何度も自分に言い聞かせる。叱咤する。恐喝する。それでも。

「なんでっ……引けない、のよお……！」

引き金は引かれなかった。

視界が曇る。声が震える。それでも照準をずらさないのは、せめてもの意地だった。

スコープの中で、敵が次弾を装填し終え、ライフルを構えた。

ああ、撃たれてしまう。

指揮官が殺されてしまう。

それでも動かない指に、どうしようもなく死んでしまいたくなっ——

「ワルサー、撃って」

あんなに動かなかった引き金が、何の抵抗もなく引かれた。

構えたライフルから放たれた銃弾は、少しだけ落下する軌道をとって、今まさに引き金に指を掛けようとしていた敵スナイパーの頭部を破壊した。

だけど、そんなことはどうでも良くて。

振り返れば、その姿があつて。

「しぎ、かん……？」

「うん、そうだよ」

問い掛ければ、優しく微笑んで肯定してくれた。

「あ、ああ、しき、かん、しきかん、しきかんしきかんしきかん……！」

何かを落とした音がした。でも、今はそんな事を気にするより、早く彼女のもとに行きたかった。

「しきかんしきかんしきかん……！」

「ワルサー、おいで」

そう言つて手を広げた彼女の胸にすがりつく。

「しきかんごめんなさいまもるっていったのにごめんなさいごめんなさいごめんなさい
い」

「いいんだよ、ワルサー。貴女は何も悪くない」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいすてないでおねがいすてないで」

「わたしにはあなたしかいないの」

自分が何を言っているのか分からない。ただ言葉を並べているとしか認識できない。
ただ。

「大丈夫だよ。私は、ずっと貴女のそばに居るから」

だから、ワルサーもずっと私のそばに居てね？

抱きしめられ、耳元で優しく囁かれたその言葉に、頷いた事だけは覚えている。

月が、雲から顔を出していた。

File. 4, the another points.

その光景は、きつと芸術的な美しさを持つているのだろう。

月光は、ある種の神秘性を照らすモノに与える。それは、二人の少女であっても例外ではない。

涙を流す少女と、それを微笑みと共に受け入れる少女。

まるで絵画の一場面のように。見目麗しい少女達だからこそ、その光景は見るものを惹き付ける美しさを持つ。

だが、忘れてはいけない。月は狂気を象徴するものでもあることを。月の女神「Luna」を語源とする単語「lunatic」「lunacy」が狂気を意味するものであることを。

ああ、だからだろうか。間違いないと美しいと言えるはずなのに、どこか歪んでいて、狂っているように見えるのは。

それなのに、いや、それ故に美しく、目を奪われてしまうのは。

いつまでも見ていたい。そう思ってしまうのを抑え、私は二人に歩み寄った。

「指揮官、ご無事で何よりです」

「……ああ、ST ARI5。そっちも、無事で良かった」

名残惜しそうにWA2000から手を放し、指揮官は私に向き直った。その顔は先程までのものではなく、いつもの指揮官の顔。

そのことを少しだけ残念に思い、それを顔に出さないように努め、与えられた命令を最後まで遂行する。

「報告します。緊急時につき、AR小隊及び第二小隊長特権をもってUMP45及びUMP9に司令部付近での潜伏を命じました。また、短距離秘匿通信にてWA2000にFive-sevenを囮とした敵狙撃手の狙撃作戦を提案。両者の受諾後に当作戦を決行。敵狙撃手の撃破を以て作戦成功と判断しました。以上です」

「そう、ありがとう。お疲れ様」

そう言つて、指揮官は微笑んだ。

ただ、それは形だけの笑顔で、WA2000へと向けるものとは違う。そこに、命令を遵守した者への労いの色は無い。

彼女の目に私達は写っていない。彼女の世界にはWA2000しか居ない。

「……指揮官、命令を」

それでも、私達は彼女に命令を求める。彼女は指揮官で、私達は彼女の人形だから。たとえそれが、私達の為ではなく、たった一人の為の指揮だったとしても。

「……私達に、命令をください」

それが、私達の存在意義だから。

「あつ、AR15から連絡だ」

そう言つて、9は通信機に耳を傾ける。彼女が連絡を聞いている間、私は敵が近付かないか少しだけ身を起こして警戒する。

しかし、居ないものを警戒しても意味はなく、9の通信が終わるまで敵は現れなかつた。

「9、内容は？」

「指揮官からの伝言。私達はこのまま待機。夜明けと共に司令部奪還作戦開始だつて」
「そう」

予想通り、とは言わない。私はそれを知らないはずだから。

だから、別の話をする。

「それにしても、面白い状況よね」

「えー、このまま夜明けまで待機だよ？ 私はいくつだなー」

「私達の現状じゃないわよ」

9は頬を膨らませることで不満を表現した。一応潜伏中という意識があるのか、手足

をジタバタと動かしたりはしない。

そんな妹の様子に苦笑しつつ、言葉を続ける。

「グリフィンから見れば、司令部が占領され、指揮官はMIA。でも、搜索不可能な場所ではなく、残留戦力にはAR小隊の一員がいるため、すぐに切り捨てるわけにもいかない」

「ただ、夜の搜索は危険を伴う。作戦が終了した地域とはいえ、敵の残党がいる可能性もあるし、それに搜索対象がどこに居るのか分からない」

「けど、もし生きていて、側に人形が居るなら、一晩なら何とかできる。そう考えさせられるほどの実績があつた指揮官にはあるし、信頼もある」

それに、現地には404小隊の二人がいるしね。

冗談めかしてそう言えば、9は頬に溜めていた空気を吐き、声を殺して笑った。それにつられて私も笑う。

そう、笑うしかない。だって、本当に出来すぎている。

AR15の一連の行動は、WA2000が周辺警戒で司令部に居ないときに指揮官が命令した緊急時の行動そのものである。状況も、WA2000と指揮官が居ない場合という限定されたものだ。

『もしも』を常に考え、その対策を考えておくのは指揮を執る者としては当たり前の事

だ。ただ、普通は広く浅く考えるもので、状況を限定し、その上敵の行動まで予言するようなものではない。敵の行動は予想は出来ても不確定なものであるから、対策に組み込むことはまずしない。

それでも、AR15は指揮官の命令の通りに指示を出し、私達はそれに従った。人形である以上、指揮官の命令に逆らうのは得策ではないから。

だが、私の最悪の予想に反して、状況は指揮官の予言と全く同じに進んだ。司令部を占領した敵の奇襲部隊は2体のAR型を残して指揮官を追っていったし、狙撃手は2発撃つてから沈黙した。

全てがすべて、指揮官の言った通りだ。

私の知る指揮官の指揮は確実性を重視する堅実なもので、失敗はなく、人形への損害もない、お手本のような指揮だ。厳しい状況の作戦でも最低限の被害に抑え、必ず成功させる。だからグリフィン上層部の覚えも良いし、AR小隊や404小隊を任せられている。

だけど、そんなものは彼女の本気ではなかったらしい。今回の一件は彼女の珍しい失敗として扱われるし、AR15の行動は彼女の判断で行われたとして、AR小隊の株を上げることになるだろう。作戦報告書の下書きを作るのは指揮官で、副官は事情を知らないWA2000だから、間違いなくそうなる。

けれど私は、彼女の本気を知った。彼女の指揮に従えば失敗は無いことを知ってしまった。

私は今日だった。それは、つい先日まで404小隊の任務に就いていたから。彼女を盗聴したのは今日が初めてだったから。

だが、指揮官の命令を何の反論もせずに実行したARR15は、いつから知っていたのだろうか。小隊長として編成される事が増えた彼女は、いつからこの甘美な毒の味を知ったのだろうか。

「わあ、綺麗なお月様」

仰向けに寝転がった9に倣って、私も空を見上げる。

確かに、綺麗な月だった。

左手に持っていた受信機が、音を立てて壊れた。

File. 0

いつだって、その声は聞こえていた。

コロセ、コロセ、コロセ、コロセ

左腕が機械になっても、繋いでいた妹の右腕の感触が残っていて、復讐を叫ぶ声がずっと聞こえていた。

コロセ、コロセ、コロセコロセコロセコロセ

その声に従って指揮をして鉄血を殺すと、声はより一層強くなる。

コロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセ！

幻聴だとは分かっていた。その声は妹ではないし、母ではないし、知っている声ではなかったから。

コロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセ！

それでも、左腕の感触は現実で、聞こえてくる声は妹と母親のものだと信じないと、耐えられなかった。

コロ……

彼女と一緒に、彼女が作った料理を食べるのが当たり前になって、それなりに彼女と話すようになったときとか。

コロ……

彼女が、私を「アンタ」ではなく「貴女」と呼ぶようになったときとか。

……

そんな時には、あの声は聞こえなかった。

そんな日が続いて、ある日。

……

体に違和感を感じて、そういえば今日はワルサーWA2000が来ていないな、と考
えながらも執務を続けて。

……コロセ

違和感を誤魔化す為に、更に執務に集中して、指揮をして、鉄血を殺して。彼女の名
前を呼んでみたりして。

コロセ、コロセ

全てに物足りなさを感じながらも、殺して、殺して、殺して、殺して。いつも一緒に

いた誰かが霞みはじめて。

コロセ、コロセ、コロセコロセコロセコロセ

「ふんや、ふんや」

耳に障る幻聴に怒鳴っても、声は消えなくて。

誰かが謝って、走り去る音が聞こえて、声が聞こえて。

コロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセ！

殺して、殺して、殺して、殺して。

コロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコ

プツリと、視界が暗転した。

目を覚ますと、私はベッドに寝かされて、点滴に繋がれていた。いつもの声も聞こえず、少しだけ冷静になれた、気がする。

首を動かして、周りを確認してみると、ベッドサイドのテーブルに手紙が置かれていた。

震える手で取った手紙には、私が栄養失調で倒れたこと、職務の一部はカリーナが一時的に引き継いでいる事が書かれていた。そういえば、倒れる少し前に怒鳴った時にカリーナがいた気がする。迷惑をかけたし、会ったときに謝らないといけない。

手紙をテーブルに戻し、ぼーっと天井を眺めながら、どうして栄養失調になったのかを思い出す。

「……そういえば、しばらく何も食べてなかったな。ずっと司令室と司令部にいたし、食べようって思わなかったし」

どうして、食べてなかったんだっけ。

ぼーっと考えてみて、思い出した。

「ずっと、ワルサーに頼ってたんだった」

ワルサー、と彼女の名前を縮めて呼んでみた。なんだかこそばゆい感じがして、毛布を顔まで引き上げる。

「うわー、情けない……。自分一人じゃ食事も出来ないなんて、ワルサーに怒られちゃう」

一通り怒られて、呆れられて、顔を赤くして、私がいなきや何も出来ないのね、なんて言われるに違いない。

そこまで考えて、ふと、思い至った。思い至ってしまった。

「ワルサーは、どうしたんだらう」

彼女が作ってくれたものを、彼女と一緒に食べる。それが当たり前になっただけで、彼女が居ないと食べる事を忘れてしまう。そんな事は何度もあったが、それが何日も続く

のはおかしい。

「……会って、言わないと」

言わなくて、何度も後悔した。だから、今度こそは伝えよう。ありがとう、と。愛してる、と。

点滴のスタンドを杖代わりにして、頭に鳴り響く警鐘を無視して、ふらふらとした足取りで、一歩ずつ踏み出す。

……

「居ない……」

彼女の自室を訪ねても、彼女の姿は無かった。

「居ない……」

食堂を訪ねても、彼女の姿は無かった。

「居ない……」

司令室にも、司令部にも、データルームにも、射撃場にも、彼女の姿は無かった。

「どっ……」

「指揮官さまっ!?!」

呼ばれて振り返ると、息を切らしたカーリーナがそこにいた。

彼女は私に駆け寄ると、腕を掴んだ。

「指揮官さま、どうして勝手に動いたんですか!? まだ、貴女の体は」

「ねえ、カリーナ」

カリーナの声を遮る。頭に響くうるさい声を無視して、聞かなきやいけないことを口に出す。

「ワルサーは、どこ」

「ずっと探してるのに、見つからないの」

「ねえ」

ワルサーはどこ？

じつとカリーナの目を見つめ、尋ねる。

カリーナの目が、少しだけ大きくなった。驚きだろうか。

それもすぐに閉じられて、彼女の瞳は見えなくなつたが。

「……今の指揮官さまには、教えられません」

ようやく彼女の口から出てきた言葉は、私が求めるものではなかつた。

「そう。じゃあ、勝手に探すから」

右腕を掴む彼女の手を払い、彼女を置いて歩き出す。そういえば、一つだけ探していい場所があつたのを思い出した。

「ダメです、指揮官さま！」

その場所の扉の前に立つ。開いた扉の先には、清潔感を感じる白い壁や床が広がっている。

中に入って、一つだけ使用中となっている個室を見つけた。扉のディスプレイには『WA2000』と表示されている。

リペアルームで、ようやく彼女を見つけた。怪我をして治していたから私のところに来れなかったのだろう。私が何日寝ていたかは分からないが、それなりに長く時間が掛かっているのだから、大怪我だったのかもしれない。

まったく、ワルサーはドジだなあ。私のこと言えないじゃん。

そう言ったつもりだったが、声としては出ていなかった。

それでも体は動いて、眠っている彼女の手を握る。

「……あのね、ワルサー。伝えたいことがあるの」

やっと声が出た。しかし、彼女はピクリとも動かない。修復中は意識があると聞いていたが、嘘だったのだろうか。それとも、ワルサーは寝る派なのだろうか。

それからは目を逸らして、彼女の綺麗な寝顔を見つめて、言葉を続ける。

「いつも、料理を作ってくれて、ありがとう。倒れてから気付くなんて遅すぎるかもだけど、ワルサーのおかげで私は生きてられたみたい」

ワルサーが居なかったら、もっと早くに倒れてたかも。

冗談めかしてそう言っても、彼女は笑わない。怒りもしない。反応を、返してくれない。

「……ねえ、ワルサー。もう私、ワルサーが居ないと生きていけないの。一人じゃ、ご飯も食べられないの」

誰かが、個室の前に立った気配がした。

「私に出来ることなら、何でもするから。指揮しか出来ないかもだけど、ワルサーのために、何だつて頑張るから」

ワルサーの体を覆うシートに、ポタリと、染みができた。視界がにじみんで、彼女の顔が見えづらくなった。

「だから、だからね……」

ぎゅつと、ワルサーの手を強く握る。かなり痛いはずなのに、彼女は何も反応しない。

「……おきてよ、わるさぁ……!」

懇願するように言っても、彼女は目を覚まさない。

下半身を失った彼女は、もう、目を覚まさない。

それからの事は、覚えていない。

気付けばベッドに戻されていて、逃げられないように、ベッドの柵に右腕が手錠で繋がれていた。

体調が戻って、カリーナに謝って、何とか指揮官に復帰して。

今でも私は、ワルサーと一緒にご飯を食べている。

『私のワルサー』と一緒に、ご飯を食べている。

もう、あの声は聞こえない。

番外編

File. Extra [Wedding]

あちこちが崩れ落ち、原形を想像することも難しくなった、レンガ造りの建物。

そこらにある廃墟と同じく人に捨てられ寂れたそれが他の廃墟と違うように感じるのは、そこが元々は神聖な場所だからだろうか。

私の目の前にある廃墟は、かつて神の家と呼ばれた建物だったらしい。この辺りの昔の地図がたまたま残っていて判明した事実だ。

放置されて長い年月が経つたのに未だに朽ちていない木の重厚な扉を引いて開けると、花畑が広がっていた。両側の壁は無いに等しく、扉と反対側の壁が奇跡的に形を保っているという有り様。天井などあるはずもなく、扉が無かったら、そこが建物の中だとは思わなかっただろう。

花畑の中に僅かに残っている通路を通り、反対側の壁まで歩いてみる。床までレンガ敷だったのか、靴がコツコツと音を立てた。よく観察してみると、少しだけ赤い布があることが分かった。

十数mを時間をかけて渡りきり、段を一步一步登って、壁の前に立つ。

少し見上げると、大小様々な色ガラスで作られた大きな窓が目に入った。所々割れてはいるが、それは赤子を抱く女性のように見える。

鳥が飛び立つ音を聞いて振り返る。

私を此処に呼び出した人がー指揮官が、そこに立っていた。

「遅かったわね。自分で呼び出しておいて待たせるんじゃないわよ」

本当はそんなに待つてはいないのだが、照れ隠しでついそんなことを言ってしまう。

だが、指揮官も照れ隠しであることは分かっているようで、スカート部分を摘まんで、少し笑いながらも上品に礼をする。

「お待たせして申し訳ありません、お嬢様。なにぶん、ドレスの着付けには疎いものでして」

「お嬢様はどつちよ。富裕層へのご機嫌取りで何度も社交パーティーに出てくるくせに」
私がそう返すと、指揮官は口を手で隠してふふつと笑った。そんな仕草すら今の彼女には似合い過ぎていて、私は少しだけ目を逸らした。

今の私達は、いつもの服装ではない。私はいつかのパーティーで着た黒のドレス。ヒラヒラとしていて落ち着かないが、持っている中では一番それっぽい服だった。

それに対して、指揮官は白を基調とした、私のものと似たようなデザインのドレスを着ている。腕には同じ色のアームカバーをしていて、機械の腕を隠しつつ彼女の魅力を

引き立てていた。

指揮官はゆっくりと段を上り、私の前に立った。そして、微笑んで、

「ワルサー、綺麗だね」

と言った。

不意打ちだったので、妙にどぎまぎとしてしまい、

「アンタもね」

と、昔のような呼び方で返すので精一杯だった。

しかし、それが指揮官のへんなスイッチを入れてしまったようで、彼女はとてもいい笑顔を浮かべた。

「赤くなつた顔も可愛い」

「うるさい」

「目を逸らすのも可愛い」

「うるさい」

「照れると私を昔みたいに『アンタ』って呼ぶの可愛い」

「うるさい指揮官貴女これで満足か」

「ずっと私の面倒を見てくれたことが可愛い」

「うるさい」

「ずっと側に居てくれたことが可愛い」

「うるさい」

「結婚してください」

「……うるさい。聞かなくても分かるでしょ、ばか」

右手を差し出す。薬指に、彼女の手で指輪が嵌められる。

彼女と目が合う。胸の辺りが暖かくなって、自然と微笑みが浮かんた。二人で、手を繋いだまま、笑った。

そして、指揮官は私の左手を引き寄せ、私を抱き寄せて。

そつと、私の唇に口付けをした。

File. Extra 「中秋の名月」

「中秋の名月？」

「うん。それが今夜なんだって」

私の自室でベッドに寝転がる指揮官は、私の枕に顔を埋めながらそう言った。

「名月ってことは、月に関係する何かなの？」

「あれ、知らなかったの？ てっきり知ってるものかと思ってた」

「いいから、教えなさいよ」

銃弾作りを中断し、枕から指揮官を引き剥がす。名残惜しそうに枕に手を伸ばす彼女を膝の上に座らせて、後ろから抱き締める形で拘束する。

「ふああ……幸せえ……ああ、中秋の名月だっけ。簡単に言えば、月が一番綺麗に見える日だよ」

すぐく昔の人は、その日に月を題材に歌を詠んだりしたそうだよ。

地味に博識な指揮官は、そんな情報も付け加え、先程まで私が行っていた作業の成果を手でいじり始めた。

一応は危険物なので注意するように伝え、彼女の髪を三つ編みに結ったりして遊びな

がら、思っていることを口に出してみる。

「良いにお……じゃなくて。そんなに綺麗なら、一度は見てみたいわね」

「ワルサー今日お休みでしょ？ 見てくれれば良いじゃん。あと、使ってるシャンプーはワルサーと同じ物だよ」

確かに、今日は一日中休みだ。指揮官が訪れなかったら、銃弾を補充分の補充分の補充分くらいまで作っていただろう。つまり、今夜月を見に少し外に出るくらいの時間はあるのだ。

だが……

「そんなに綺麗な月なら指揮官と一緒に見たいし、今年はパスするわ。貴女も、今日は仕事が……」

仕事が、ある。そう、休みの私と一緒に寛いでいる彼女には、仕事があるのだ。

何かを察したのか、わー銃弾きれー、だなんて言い始めた指揮官の拘束を強め、耳元に口を近付ける。

「ねえ、指揮官。貴女、仕事はどうしたの？」

「私、今日はワルサーと一緒に居たいな……」

なるほど、逃げたと。

拘束する手を下にずらして、哀れ仕事を押し付けられたカーリーナの代理として、指揮

官の脇腹をつねり折檻する。

「痛い痛いワルサー痛い！ 人形の力をフルで發揮しないで痛い！ あつ何か気持ちいい痛い痛い！」

「逃亡者に罰を与えるのは当たり前前よね？ ほら、何か言うことがあるんじゃないの？」
「ありがとうございます！」

新しい扉を開き始めた変態の脇腹を更に強くつねり（後で確認したらそこだけ他より凄く赤くなっていた）、ごめんなさいという言葉が聞こえたあたりで手を離す。

肩で息をする指揮官に少しだけ興奮しつつ、理性で獣を抑えて、指揮官の手を取って立たせる。

「カーリーナには一緒に謝ってあげるから、今から執務室に行くわよ」

「書類仕事やだあ……活字見たくない……」

「ほら、私に出来ることなら手伝ってあげるから、しっかりとしなさい」

そう言つて、左手の薬指に輝く指輪を見せる。指揮官と誓約した人形は、ある程度の特権が与えられる。重要な書類は無理でも、事務的なものなら代わりに処理することはできる。

だが、それでも指揮官はやる気がでないようで、歩いてはいるものその足取りはとても重い。

そこまで書類仕事が嫌なのかと呆れつつ、仕方がないので、私の望み兼指揮官のやる気を出す魔法を、彼女の耳元で囁く。

「早く仕事が終わったら、私、貴女と一緒に月が見たいわ。……お酒を飲みながら、ね」
「さっさと終わらせますー！」

先程までとはうって違って、走り出しそんな勢いで執務室に向かう指揮官。

そんな彼女に手を引かれながら、私は現金なパートナーに苦笑した。

時間は経って、午後十時頃。案の定カリナに小言を言われ、しかしご褒美を目の前にぶら下げられた指揮官は、逃げていた間の遅れを取り返すペースで書類を捌いた。私も手伝いはしたが、やる気を出した彼女のスペックはかなり高く、殆ど彼女一人で終わらせたようなものだろう。

そして、今現在。約束通り、私と指揮官はグラスを交わしながら、基地の近くの適当なスペースでお月見をしている。

「んっ……。これ、美味しいわね。お米のお酒って聞いて避けてたけど、今度からは飲むようにしてみようかしら……」

「いいなー、お酒いいなー。私も飲みたいなー」

「貴女は未成年でしょ。ジュースで我慢なさい」

グラスを交わすと言っても、日本酒を飲む私と違って、未成年の指揮官はジュースを飲んでいいる。「お酒を飲みながら」は隠語というか、この後のお誘いの言葉だ。

「ワルサーはズルいなー。私はジュースなのになあ」

「あと一年ちよつとの我慢でしょ。それまでお預けにしておきなさいよ」

「ワルサーは造られて数年なのに」

「私は人形だからいいの」

お酒を飲ませると絡んでくる指揮官をあしらい、グラスをあおる。

「ほら、それより月を見なさい。今日は、その為の外に出たんだから」

「……ソウデスネー」

不服そうにちびちびとジュースに口を付ける彼女の頭を撫でて、空を見上げる。

もし今が夜戦中だとしたら、きつと舌打ちをしていたであろう。そんな事を考えてしまうくらい、美しく輝く白銀の月が、空に浮かんでいた。

「……月が綺麗ね」

少し酔っているのか、率直な感想が口から漏れた。そう言えば、昔の人がそんな表現を用いていたようなと少しぼーっとする思考で考えていると。

「私、死んでもいいわ」

隣に座る少女が、澄んだ声でそう言った。

それで、漸く思い出した。私が口にした言葉を、極東の島国の作家がどんな英文の訳としたのかを。

勿論、指揮官の返事の意味も知っている。だが、何となく思うことがあつて。

「死ぬなんて許さないわよ」

氣付いたら、そう言っていた。

指揮官が、驚いた顔で私を見ている。

グラスに日本酒を注ぎ、喉を潤してから、彼女の顔を、瞳を、じつと見つめる。

「生きて、ずっと私と一緒に居てもらうんだから」

グラスを置いて、誓約の時とは違って、私が彼女を抱き寄せる。

そして、誓約の時と同じくー。

目撃者は、空で輝くお月様だけだった。